

# メディアとしての自己

## —情報世界を生きるための社会学—

大 黒 正 伸

### 1. 説明項としてのメディア

メディアという言葉はもう日本語としてすっかり定着している。その意味するところは、情報の伝達、報道、配信、編集を行う組織やその制作物といったところだろう。それゆえ、メディアという言葉で新聞やテレビを思い浮かべる人はいても、言語そのものや貨幣を思い浮かべる人はそれほど多くはない。「メディア研究」「メディア論」という場合、人間的・社会的現象としてのメディア（と呼ばれるもの）を何らかの理論、概念、図式で論じることを指すことが多い。「マス・メディア」研究、ネットワーク研究、ローカル・メディア研究、SNSの調査、などがそれである。この場合、メディアは被説明項である。

しかし、本論で言うところのメディアは、抽象的な人間や社会の能力を指す言葉であり、その原型は言語と貨幣である。タルコット・パーソンズとニコラス・ルーマンに始まる機能的システム理論では、むしろメディアは説明項になり得る。パーソンズは、1960年代に「象徴的に一般化された相互交換のメディア」という一般的な概念を考案し、その変種をいくつか用いて社会的現実を説明しようとした。ただ、パーソンズは経験的なメディアリサーチはほとんどしていない。筆者もまた経験的なメディア研究をしていないが、メディアを説明項にした社会理論を展開する意味はある。

フェイク・ニュースやオルターナティブ・ファクトといったネット時代の新たな「病理」が言われるようになった。かつては「落書き」や「酒席の雑談」でしか見聞できなかったような類の言説が公的・準公的な情報空間に漏れ出してきた。これは、端的に言えば、メディアの混乱である。メディアの混乱とは、人々の象徴的・社会的実践の混乱である。何か情報を「伝達する」経験的な組織のことをメディアと呼ぶだけでこうした事態を解き明かすことは難しくなってきたのではないだろうか（大黒 2006）（高

橋 2016) (正村ほか 2012)。ここでは多様な「経験的」「実体的」なメディア組織体ではなく、パーソンズにならって「象徴的メディア」をモデル化することで、この私自身が情報世界を生きていく術を探らうと思う。

## 2. 情報世界と象徴的システム

### 2.1 生活世界は情報世界

ここでは、情報によって構成されている日常生活の局面を情報世界と呼ぼうと思う。我々の日常生活は情報で構成されていると言っても過言ではない。太古からそうだったとも言えるが、現代人は特にそうした観念が妥当する。筆者自身は、そもそも「生活世界 (Lebenswelt)」がなぜ「生命世界」と訳されないのだろうかという疑問を以前から持っていた。それは、レーベンというドイツ語には「生の哲学」を経てきた歴史があるからではないかと思いついた。

哲学的な「生」も情報的な性格を持っていると言ってよい。人間の象徴的能力は、自己とのあらゆる関係について、時空と身体を捨象できる能力でもある。その意味では、生活世界の情報世界化が可能である。それは、日常生活における「縮減」戦略でもある。

今さら情報世界といえ、シュッツやハーバマス以前の「独我論」に退行するかのような印象を与えるかもしれないが、必ずしもそうではない。情報世界では、自己は互いに他に対するメディアとしてしか存在しない。「生」(生活)もまた、相互に媒介しあうプロセスとしてしか顕現しないのである。

近代社会はすべてをメディアにしてしまう社会だと言ってよい。すべてはすべてにとってメディアなのであり、この「私」さえもメディアである。経済の金融化、情報化、ソフト化と呼ばれるものは、すべてをメディアにしてしまう近代化の結果である。近代哲学の泰斗ゲオルク・F・W・ヘーゲルは、人間存在の本質を「媒介 (Vermittlung)」に見た。イエナ大学時代から『精神現象学』にかけて、人間の(つまりは人類の)「精神」の成長は意識から自己意識へと媒介されることから始まる(大田 1987)。20世紀の社会学でも、ヘーゲルを受け、トマス・ホートン・クーリーの「鏡我論」を経て、ジョージ・ハーバート・ミードは「主我」と「客我」の区分を導入した。

このように人間存在の自己関係性、または言説の自己準拠は決して新し

い観察ではなく、それほど目新しい観念でもない。ただ、それを社会理論（社会学理論、社会システム理論）における必須要件として強調し徹底したのは、ニクラス・ルーマンの功績である。その一方で、ルーマン自身は、生活世界によるノスタルジックな基礎づけ言説を評価しない（Luhmann 1986）。私もまた、生活世界への疑念は共有している。分析的で工学的なシステム論理を志向する自分としてはルーマンのシステム存在論には完全には賛同しないものの、そのプラグマティックな有用性は認めざるをえない。

ただ、ここでは主にパーソンズと彼に連なる論者の道具立てを多く参照する。私は以前から「素朴にして有益なるパーソンズ」という言い方で彼の理論を評価してきた。私にとっては、パーソンズは「ツール」である。社会学的知識の実用的な意味からして、パーソンズは、分析科学を相互に媒介する結節点として有用だと考えている（大黒 2009）<sup>1)</sup>。しかし、自己言及性または自己反省の理論化について、パーソンズには弱いところがあることは否めない。彼の分析的な視点をむしろ徹底しながら、自己反省を理論化する可能性を探りたい。

## 2.2 間接化・抽象化・象徴化

生活世界の情報化は、歴史的に間接化、抽象化、象徴化という段階を経て進展してきた。人間同士の相互作用は、文明化に伴って（または文明化を伴って）間接化され、抽象化され、象徴化される。高度に複合的な機能分化を遂げた近代社会においては、個人どうしの関係も個々の集団間の関係も様々なメカニズムの媒介を被り、その媒介作用によって促進（または阻害）されるのである。

ただ、抽象化はいくつもの段階を経て高度化される。空間的また/ないしは時間的に間接化された有目的な協働を為そうとすれば、人々は組織を形成せざるをえない。そこにおいては、或る程度は、人間の個性は捨象され、地位および役割として抽象化されていく。一般的な関係（たとえば上司と部下、代議士と有権者）が、一般的な主体（たとえば主任や部長、議長、委員など）によって、一般的なメッセージ（たとえば通達、命令、法規、条例、投票など）をとおして作動する。

しかし、人間の社会組織を安定して作動させるためには、抽象的事態を再度「具象化」する必要がある。人間精神の記号論的な作動は、解釈を可

能にする。解釈に伴う「再具象化」をここで象徴化と呼ぼうと思う。或る特定の商品、例えば米や貴金属は、それが経済的価値の一般項として、抽象化された経済的価値を表示するようになった後、今度はその具体的な姿が抽象的数量である経済的価値を象徴的に示すようになる。たとえば、権力の量や差異として抽象化された関係は、地位の名称や規則に依拠した特殊なメッセージによって再具象化される。制服は権力の象徴となり、金は富裕の象徴となる。貨幣と権力は、こうした抽象化と象徴化の両方を含む一連の進化的な経緯を経て高度化してきたと考えられる。

### 3. 貨幣モデルの可能性

#### 3.1 交換モデル

社会関係の高度化、複雑化と偶発化に伴って、言語の能力を補完するものとして「象徴的メディア」が現われるとパーソンズは考えた。パーソンズは、とりわけ「査定 (sanction)」の先鋭化を強調する。こうしたメディアは信号ではなく、象徴である方が都合がよい。広範な解釈を許しながら、解釈の誤りを極小化するためには、ある程度の抽象性とある程度の具象性が必要である。貨幣を例にとれば、多様な商品の時間的・空間的に多様な取引関係を網羅するためには多様な姿（たとえば現金、手形、預金残高、利子など）を採るが、経済的価値の一般項として関係当事者の期待を維持するために一貫した評価規準を持たねばならない。パーソンズは、こうした複雑かつ偶発的な関係を制御する能力の原形を、古典的な貨幣定義に求めた。交換価値と価値尺度と価値保存がそれである。これらの特徴は、経済的文脈において自由とリスクの両方を社会関係の当事者にもたらず (Parsons 1969) (大黒 1990)。

ルーマンは、象徴的に一般化されたメディアを「流布メディア」と「成果メディア」に区分した。ルーマンによれば、パーソンズの言う「象徴的に」とは社会的な次元の事柄であり、「一般化」とは時空間的な次元に関わるとされる。貨幣はルーマンの言う「成果メディア」の代表である。パーソンズの「貨幣モデル」はルーマンによって「伝送モデル」として批判されている。システムとシステムとは、何か実体的な同一の財を、また価値のような同一の「情報」すらも伝達することはないとされた (Luhmann 1997)。近代社会の間接性・抽象性・象徴性は、あらゆる社会的行為の同一性を切り崩していく。当の貨幣ですら、「電子貨幣」や「仮想通貨」の

時代を迎えていっそう「情報化」されている。ただ、私は私の情報世界を生きるために、あえてメディアを「貨幣化」することを考えている。それは、情報世界の「合理化戦略」と言ってもよい。

よく知られていることだが、パーソンズは初期の主意主義的行為理論以来、「行為 (action)」という人間的現象を特権的な項目として扱っていた。社会システムは社会的相互行為から成るシステムである。この点、コミュニケーションを最小単位とするルーマンとは異なる。パーソンズは生涯、行為理論とシステム理論とを接合しようと努めた。パーソンズにとって、社会システムは社会的行為から構成されているのだが、それだけではない。社会システムは、社会的行為を「生産」し「交換」し「変換」する。それは命令だったり、助言だったり、指導だったり、非難だったりする。経済的行為は、権力によって政治的な「力」に翻訳される。権力は、経済的行為を政治的行為に「変換」するのである(大黒 2009)<sup>2)</sup>。相互作用の量的拡大と複雑化は、相互作用過程の「間接化」と「抽象化」と「象徴化」を要請する。こうしたパーソンズ解釈は、コールマンの交換図式からヒントを得た。

社会的交換理論が社会構造という面を軽視している点について批判を受けたことはよく知られている。クロード・レヴィ＝ストロースらの「一般交換」という観念によって、AとB、BとC、CとDという個々の関係ではなく、全体構造からの「応報」という面が指摘され、婚姻がまさにその例として挙げられている。ただ、それに加えて、私は「媒介」という事態もまた重要だと思う。

コールマンは信用による媒介を強調したが、政治における「媒介された交換」も論じている。アメリカの政治環境として有名なロビーイングは、パーティーではない。いわゆる「政党マシン」は、システムが行為を産出する好例である。政党は、一種の「手形交換所」の機能をはたしている。ここでも「信用」が多様な主体間の交換を促進する事態が描かれている(図1)。

パーソンズの考案したメディアは、こうした「媒介」の様相を社会的行為システムの様相として分化させたものだと言ってもよい。彼は、周知のように、査定とメッセージ通路によってメディアを4つに区分した(表1)。他者の状況をつうじて否定的な査定を動員する力を権力、他者の動機をつうじて否定的な査定を動員する力をモラル(パーソンズは価値コミットメン

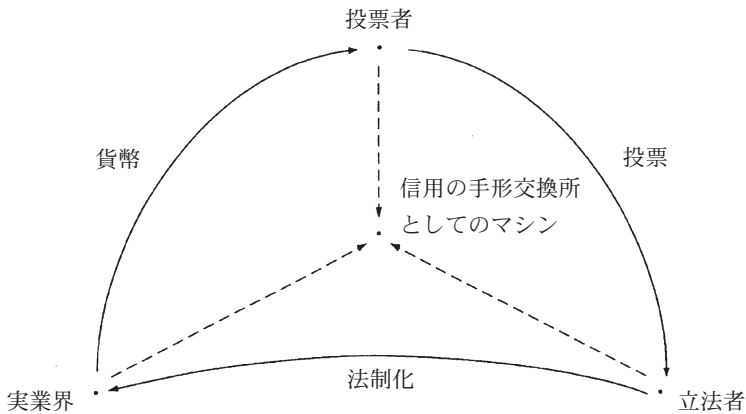


図1 政治システムにおける信用制度としての政党マシン

出典：(Colemann 1990: 128 (Fig. 6.4))

表1 メディアの区分

		通路	
		状況	動機
査定	否定的	権力 (威嚇・命令)	モラル (非難)
	肯定的	貨幣 (誘引)	評判・権威 (説得・助言)

出典：(Parsons 1969) を一部改変

ト)、他者の状況をつうじて肯定的査定を動員する力を貨幣、他者の動機をつうじて肯定的査定を動員する力を評判または権威（パーソンズでは影響力）と呼ぶことにする。

パーソンズは、象徴的メディアの議論を権力から始めた。完全なものではなかったが、彼は権力を通貨に準えることに情熱を注いだ。ただ、彼の権力は、もっぱら制度化された組織的な作動に関わるものだった。民主的に制度化された社会では、有権者から権力を「預けられた」政治家や政権が、自分に許された裁量の範囲内で権力を「信用創造」できる。選挙公約

とは違った政策を考案・実施することも可能である。その意味では、パーソンズの表現を借りれば、政治家・政権は権力の「銀行(Banker)」である。政治の現実「ゼロ・サム」ではなく、権力の「量」は変動する(Parsons 1969)。

権力は、こうした制度化された組織的な信用だけで作動するわけではない。初期のルーマンの『権力』(Luhmann 1975)では、権力は、回避選択肢を提起することによる選択の(事実上の)強制だった。進学を希望する学生のもとに入営命令(召集令状)が来た場合ルーマンは例として挙げている。進学希望(A)は入営命令(B=非A)に出会うことで入営拒否(非B)に変換される。進学と入営との間で選択することを強いられるのである。メディアは、選択肢を操作することで個々の選択行為に一定の文脈を持ち込む。メディアによるシステム間「翻訳」は、文脈によって行為選択肢の意味が変更されることでもある。

ただ、もちろん、権力の場合、こうしたA=非B=入営拒否を選択することを抑制する否定的な「実力」の存在が背景にある。パーソンズはそうした背景を通貨の「セキュリティ・ベース」に準えた。貨幣にとっての金は、権力にとっては実力である。通貨の信用失墜は本位貨幣(金貨)の需要を促す。公権力の権威失墜は直接的な暴力を誘発する。評判や専門家の権威が怪しくなると共同体的な愛着へと後退し、集団のモラルが危機にあるという認識は「人間としての」常識に訴えるようになる。パーソンズは、極右国家主義やキリスト教原理主義の危険を強調していた(表2)。

表2 社会的メディアのコードとセキュリティ・ベース  
(カッコ内はパーソンズのオリジナル)

分化したシステム	メディア	コード(価値基準)	セキュリティ・ベース
経済システム	貨幣	効用	金
政治システム	権力	有効性	実力
共同体システム	評判・人気・権威 (影響力)	同調・共感(連帯)	帰属意識・愛着
信託システム	モラル (価値コミットメント)	完結性	罪の意識

出典：(Parsons 1969) (Parsons 1977) を一部改変

### 3.2 市場モデル：同一システム内の相互行為

パーソンズは分化したシステムとシステムの間には「生産要素」と「生産物」の交換を想定した。その結果、彼のシステム図式は極端に煩瑣なものになっていく。しかし、私は、パーソンズのシステム理論を行為理論の方へと引き戻したいと思う。社会システムの内部分化（政治、経済、共同体など）は、相互行為文脈の分化でもある。政治には政治の相互行為文脈があり、経済には経済の相互行為文脈がある。

分化した同一のシステム内部では、文脈を付加された選択主体の間にメディアを媒介にした交換市場ができあがる。パーソンズ晩年の弟子ヴィクター・リッツは、共同体的な文脈における影響力メディア（権威や評判）と結社の遂行（自発的な協同行動 *associative performance*）の需給曲線を描いた (Lidz 1991)。希少な時間と労力を要する結社の遂行という社会的行為は、一定量の影響力メディアとの交換によって獲得される。息子の私がいくら父親に禁煙を言っても相手にされないが、医者言えば禁煙してくれる。禁煙という行動をさせるには、一定の影響力（権威・説得力）支出を伴うわけである。寄付や会合出席なども同様である。

リッツは、ミクロ経済論のアナロジーを駆使して、影響力（権威・説得力）市場の分析を進めた。図2に見る需給曲線のスケジュールは、貨幣と

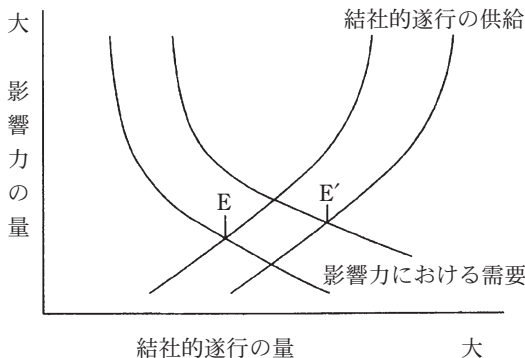


図2 影響力と結社の遂行とのスケジュールにおける外向きの変化

\* 連帯的諸関係のシステムにおける成長を表している。

\*\* E' = 成長的均衡点 (= 影響力「市場」の成長)

出典：(Lidz 1991: 123)



財の関係に準えた一種のアナロジーである。交換が成功裏に行われ、結社的遂行、協力行動、賛同や敬意などが流通すれば、需給曲線の「外側」への変化が起き、市場は活性化する。その結果、全体の「効用」すなわち「連帯」「統合」が増進することになる。市場の成長と同じである(図4)<sup>3)</sup>。

### 3.3 翻訳モデルによる補完：機能分化したシステム間

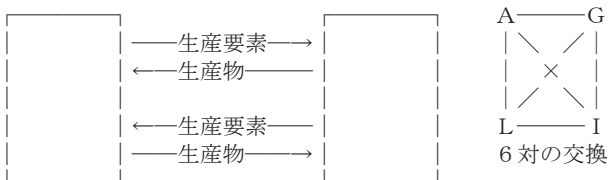
もちろん、貨幣ならざる象徴的メディアであるから、市場モデルには一定の限界がある。サービスと貨幣の交換と同じようにはいかない。象徴的メディアは貨幣のような物的な移転が存在しない。従って、量的な表出が困難である。協力したからといって、また指示・命令に従ったからといって、提供者はどんなメディア「収入」があるのか。ここでは、「一般交換」という視点を想起すべきである。協力しておけば、「恩義」や「実績」という漠然とした事柄が相手か集団の記憶に残ることで「いつの日か」協力を要請しやすくなる(と期待できる)<sup>4)</sup>。

しかし、そのためにはメディア市場の「外部」が重要な意味を持つ。市場には必ず外部が存在する。システム理論的に表現すれば「環境」が存在する。共同体のシステム(または相互作用文脈、または影響力市場)にとっての外部としては、政治的システム(権力市場)やモラル(道徳的文脈)が考えられる。パーソンズは、煩雑なことに、機能的に分化したシステムどうしにも市場を想定した(図3)。

図に見る限り、メディアとメディアの交換は各国の通貨取引(円とドルなど)に似ているが、実際のパーソンズの議論はむしろ「翻訳」に似ていた。「生産物」と称されるものは、例えば政治から経済へは「貨幣」として、経済から政治へは「権力」として流入する。つまり、互いに相手のメディアに変換することになる。ただ、それらの「生産物」の実体は、何らかの「社会的行為」と言ってよい。貨幣であっても、それは物理的な実体ではない。

社会的行為としての「貨幣」は、数量化された購買力ないし決済力として見るべきである。しかし、権力の文脈では、貨幣の支出は必ずしも肯定的な査定を動員しない。例えば、罰金のような場合は、むしろ否定的な査定を相殺する方に働く。貨幣は権力の文脈に翻訳されるのである。

システム内の相互作用を行為理論的に表現すれば、同一基準での合理的決定の交換(市場モデル)であり、質的に異なった基準(コード)による諸



(全体社会) 社会システムのAGILと相互交換範型 (< >はメディア)

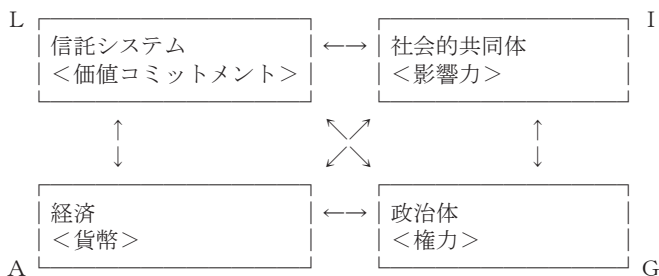


図3 パーソンズによるシステム間の「交換」(生産モデル)

出典：(Parsons 1969, 1977)

システム間の相互作用は、行為文脈の交差、すなわち解釈ないし翻訳と表現できるだろう(図4)。

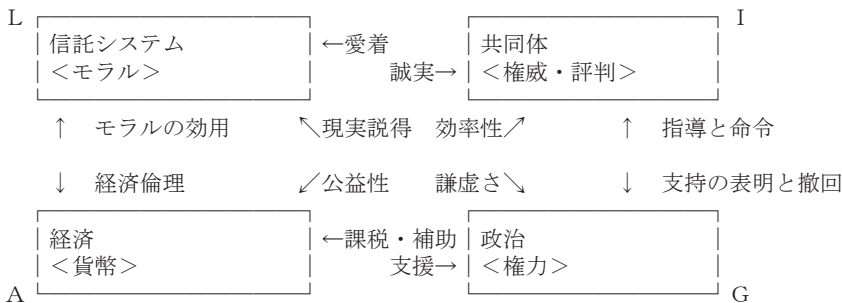


図4 システム間の翻訳・変換(筆者の試論)(< >はメディア)

出典：筆者作成

### 3.4 象徴的メディアの病理

パーソンズは、社会的行為の流動性障害を、インフレーションとデフレーションに準えた。第二次大戦後のアメリカで起こったマッカーシーらの「赤狩り」を例にして権力の「デフレパニック」を論じている。冷戦初期のアメリカ政治では、連邦政府は外交上の新たな事態に備えて新たに支持や正統性の基盤を求めていた。共産主義への敵意と不安は、国内のしかるべき権力的地位にある者に国家への忠誠を過剰に要求する方向へと世論を導いた。権力への信用危機が起きたわけだが、これは政治内部と言うよりも、国家への忠誠という共同体文脈で起こった事件であった (Parsons 1969)。

権力も含めて、メディアは欲望の対象になり得る。往々にして、メディアの獲得それ自体が目的になってしまうことがある。手段の目的化と言うべき事態であるが、パーソンズは晩年、「権力中毒 (addiction to power)」という言葉を使っている。彼は、1970年代前半の「ウォーターゲート事件」における大統領周辺の動きをその例にしている (Parsons & Gerstein 1977)。ニクソン大統領の二期目当選を目指す共和党内の「再選委員会 (CREEP)」を中心に、行き過ぎた活動が重なった。ヒロインも権力も適切な使い方がある。政府中枢内部での相互不信と狭い集団に対する忠節が権力の不適切な行使に導いた。

単独の象徴的メディアの市場に依存することがここで言う「中毒」である。「中毒」は、部分システムどうしで他方のコードへと適切に社会的行為が「翻訳」されない場合に起こる。金銭の蓄積が自己目的になる「守銭奴」や道徳的に優位でいることが自己目的となるモラハラ、SNSで炎上も辞さない自己顕示……これらは、それぞれ「貨幣中毒」、「モラル中毒」、「評判中毒」と名づけることができるだろう。

権力と評判の区別と翻訳ができている者は、「あの監督は嫌なやつだが有能だし勝てるから従おう」という態度でいるだろう。他方、権力中毒の症状では、「勝ちたかったら、練習でもプライベートでも私の言うことを無条件に聞け」という態度が見られるかもしれない。評判 (人気) とモラルの区別と翻訳ができていない者は、「彼のファンだし応援してるけど、自宅には行かない」という態度を保つだろう。他方で、評判 (人気) 中毒の症状では、「ファンなら、何でも言うことを聞きな」という態度が見られるかもしれない<sup>5)</sup>。

## 4. まとめ

### 4.1 自己は自己にとってメディアである

以上のような「中毒」を回避するにはどうしたらよいだろうか。それには、やはり「自己」という存在が鍵になるだろう。

池上嘉彦の「記号論」によれば、必ずしも伝達や表現といった意図が存在しない場合、却って豊かな意味世界を伴うような「ことばらしいもの」が存在する。例えば、雄大な自然に触れてそこに生命の偉大さを感じることが人間にはできる（池上ほか 2001）。こうした「記号論的作動」は、ここで言うところの象徴的メディアがもたらす効果を基礎づけるものである。

また、ルーマンは晩年、媒質（メディア基質 mediale Substrat）と形式（Form）という区別を導入した。彼は、空気と光を知覚の媒質の例として挙げる。空気と光は、聴覚あるいは視覚それぞれに特有の知覚状況を媒介している。光はそれ自体としてではなく、何らかの（反射されるべき）形姿として、つまり形式として視覚に寄与する。言語もまた、形式を受け入れられるための媒質として捉えられる。単語はそれ自体ではまとまった意味を成さない。「文」という形式が必要となる（Cf. Luhmann 1997）<sup>6)</sup>。

池上の解釈次元やルーマンの媒質／形式という議論は、社会的場面を包摂し、コミュニケーションを「越えた」「メディア一般」の議論に見える。パーソンズ流に言えば、社会的行為のシステムすなわち社会システムと個人パーソナリティ（ルーマンでは意識システム）とを「共鳴」させるメディアの有無という問題につながる。パーソンズはAGILに沿って、感情（社会システム）や遂行能力（パーソナリティ）、知性（行動システム）、状況定義（文化システム）などを考えた。私は、自己の反省能力をそこに位置付けたいと思う。この私は「メディアのメディア」として他者に作用している。私自身もまた、私自身にとって「メディア」である。

ルーマンに倣えば、情報世界は多様な「媒質」に満ちている。そこにはパーソンズの想定したようなハイアラーキーは存在しない（Künzler 1989）。しかし、ハイアラーキーも分化も、パーソンズにとっては分析的なツールだった（Jensen 1980）。システム理論は一種の縮減戦略である。あえて何らかの差異化を施すことによって、情報世界の無限の複雑性を処理するための拠点としてシステム理論を「使う」ことができる。そして、

観察や解明から一步進んで、そこから生きる知恵を獲得することができるかもしれない。生活世界へのノスタルジーではなく、システム分化とコード化（自他、内外、上下など）という「自己像」が可能である。

職場での指令の多くは権力市場だが、実際は様々な文脈が複合している。上司は尊敬できる人なのか、同僚は信頼できるのか、この私はどう思われているのか、この仕事は報酬や昇進で「割に合う」のか、そもそもこの仕事って「黒く」ないのか？ 反省とは、自己が自己のメディアになることである。

#### 4.2 多様な文脈に生きる

メディアの「貨幣化」戦略からすれば、私たちは賢い消費者であるとともに、賢い投資家でもあるべきだ。賢い消費者とは、メディアの中毒に陥らない人のことである。私のこの地位や立場は他者の反応や社会の文脈によって意味がある。単独の行為文脈すなわち「メディア市場」に生活を委ねないようにしたい。狭いシーンで権力やモラルを行使する場合は、少し文脈（つまり分化したシステム機能）をずらしてみるべきだ。ネットで炎上さえすればそれが事実かどうか関係なくなるかもしれないが、モラルという文脈にしばし移ってみるべきである。賢い投資家とは、広い社会的文脈（つまり一般交換）を意識したとき、それがどのような利得につながるのかを合理的に考える人である。

とすれば、機能的に分化した場面・文脈（つまり、システムまたは「市場」）それぞれで信用のおける「銀行」を見極めた方がよい。社会学的な知は、そうした銀行の一つになり得るかもしれない。自分の情報世界でどんな市場ができあがっているかを見極めるためのモデルとして役立つかもしれない。ただ、銀行は取り換え可能である。役に立たなければ取り換えるべきである。

エコノミストという職業が存在する。彼らは必ずしも大学で教えたり研究したりする「学者」とは限らない。官庁や企業などで経済の専門家としてリサーチやアナリシスと助言を提供する人々も指す。社会学者の世界では、どうだろうか。エコノミストのように制度化された「応用通路」はさして多くないかもしれない。政治評論家やジャーナリストは、必ずしも社会学の知見を駆使しているわけではない。カウンセラーやソーシャルワーカーにも社会学の知識は有益なはずだが、むしろ多くは資格を得るための

教養に属するように思われる。

社会学者もエコノミストのような職業階層を目指すべきだと言いたいわけではない。むしろ逆である。社会学者は、社会学的知見を日常の情報世界で活かすべきである。エコノミストは彼ら自身が経済社会の「部分システム」であって、経済社会と自己言及的な関係にある。社会学者は、この自己言及を自己批判へと活かすことができるはずである。社会学は社会学にとってメディアなのだから。

#### 注

- 1) ルーマンの理論志向を踏まえながらもパーソンズの分析的視点を評価した論者に、シュテファン・イエゼンがいる。ただ、ルーマンとは違って、彼はパーソンズの社会システム理論に人間学的な視点を見出し、それを評価する (Jensen 1980) (Jensen 1984)。本論は、イエゼンのパーソンズ解釈に多くを負っている。
- 2) こうした解釈は一見風変わりなものに見えるが、素朴な分析的モデルである。イエゼンは、パーソンズの分析的視点を徹底することを提案した。「具体的」システムという言葉は矛盾と誤解のもとである。現実にはシステムとシステムの関連によってしか接近できない (Jensen 1980 : 122)。
- 3) こうしたリッツの需給曲線モデルでは、交換される財によっては形状の異なる多様なスケジュールも想定されている (Lidz 1991)。私は以前、それを財の価格弾力性に準えて論じたことがある (大黒 2001b)。それは (リッツとは異なって) 必ずしもアノミーなどの「病理」ではなく、いわゆる「上級財」「下級財」という区別の問題であろうと思われた。
- 4) 貨幣をモデル化する場合、希少性の問題が問われるべきだという見方もできる。希少性が選択と交換をもたらすと考えるなら、貨幣以外の象徴メディアと交換されるべき対象はいかなる意味で希少かと問われることになる。経済学がそうであるが、希少性が合理的選択をもたらすと考えるなら、そうなるだろう。しかし、逆の道筋もまた考えられる。合理性という意識が希少性を生み出すという論理、または象徴的な文脈の産物としての希少性という観念がそれである。
- 5) レイナー・バウムはメディアの「病理」を「コンフレーション (conflation)」と呼んだ。これは、メディアと事物・事態との関係に関わる観念である。関係が薄くても厳格すぎても相互作用は攪乱される (Baum 1976)。本論で言う「中毒」とは多少違うが、興味深い。

- 6) リッツは社会的行為のシステムとして社会システムを考察する場合、言語の機能を血液の循環に準えていた。ルーマンの「媒質」の觀念に照らしてみると、興味深いアイデアである (Lidz 1981)。

### 参考文献

欧 文

- Baum, Rainer, C. 1976, "On Societal Media Dynamics," J. J. Loubser et. al (des.), *Explorations in General Theory in Social Sciences: Essays in Honor of Talcott Parsons*, vol. 2.
- Coleman, James, S. 1990, *Foundations of Social Theory*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1990.
- Jensen, Stefan, 1980, *Talcott Parsons*, Teubner Studienskripten, Stuttgart, 1980.
- , 1984, "Aspekte der Medien-Theorie : Welche Funktion haben die Medien in Handlungssysteme?," *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 13, Hft. 2, April 1984, S. 145-64.
- Jensen, Stefan. & Naumann, Jens, 1980, "Commitments: Medienkomponente einer oekonomischen Kulturtheorie?" *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 9, Hft. 1, S. 79-99.
- Künzler, Jan, 1989, *Medien und Gesellschaft : Die Medienkonzepte von Talcott Parsons, Jürgen Habermas und Niklas Luhmann*, Enke Verlag.
- Lidz, Victor, M. 1981, "Transformational Theory and the Internal Environment of Action Systems," K. Knorr-Cetina & A. V. Cicourel (eds.), *Advances in Social Theory and Methodology : Toward an Integration of Micro- and Macro-Sociologies*, Boston, Routledge & Kegan Paul, 1981, pp. 205-33.
- , 1991, "Influence and Solidarity: Defining a Conceptual Core for Sociology," Roland Robertson & Bryan S. Turner (eds.), *Talcott Parsons : Theorist of Modernity*, 1991, pp.108-36, Sage Publication.(=1995, 中久郎ほか訳『近代性の理論——パーソンズの射程』恒星社厚生閣)
- Luhmann, Niklas, 1975, *Macht*, Ferdinand Enke Verlag (Stuttgart). (=1986, 長岡克行訳『権力』勁草書房)
- , 1976, "Generalized Media and the Problem of Contingency," Loubser, J. J. et al (eds.), *Explorations in Social Theory*, vol. 2, pp.507-32, The Free Press.
- , 1997, *Gesellschaft der Gesellschaft*, vol. 1 & 2, Suhrkamp, 1997. (= 2009, 馬場靖雄ほか訳『社会の社会』1・2 法政大学出版局.)
- Parsons, Talcott, 1969, *Politics and Social Structure*, The Free Press, 1969. (=1973

～1974, 新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房.)

- , 1977, *Social Systems and Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977. (=1992, 田野崎昭夫ほか訳『社会体系と行為理論の発展』誠信書房.)
- Parsons, Talcott & Platt, Gerald (eds.) 1973, *The American University*, The Free Press.
- Parsons, Talcott & Gerstein, Dean, R. 1977, “Two Cases of Social Deviance: Addiction to Heroin, Addiction to Power,” Edwin Sagarin (ed.), *Deviance and Social Change*, Beverly Hills, Calif., SAGE Publication.

## 邦文

- 池上嘉彦・山中桂一・唐須教光, [1994] 2001, 『文化記号論——ことばのコードと文化のコード』講談社 (学術文庫).
- 大黒正伸, 1990, 「パーソンズ権力論の意義と課題——システム・メディア論における通貨モデル」『社会学史研究』第12号 (特集: 社会学史上におけるパーソンズ): 33-52.
- , 1992, 「権力のパラドックス——パーソンズからルーマンへ」『社会学史研究』第14号: 66-81.
- , 2001a, 「社会統合の市場モデル——パーソンズとリッツにおける影響力概念の展開 (I)」『ソシオロジカ』25 (102): 51-69.
- , 2001b, 「社会統合の市場モデル——パーソンズとリッツにおける影響力概念の展開 (II)」『ソシオロジカ』26 (102): 95-113.
- , 2003, 「パーソンズ理論における貨幣と言語——シンボリック・メディア理論の再検討」松本和良・江川直子・大黒正伸 (編)『システムとメディアの社会学』: 33-65.
- , 2009, 「パーソンズ社会理論の方法的構想力——一般理論から「媒介」の理論へ」創価大学学位請求論文 (博士 (社会学): 博乙第19号)。
- 大田孝太郎, 1985, 「ヘーゲル『媒介』論の成立」『哲学論叢』16巻: 155-171.
- 大黒岳彦, 2006, 『<メディア>の哲学——ルーマン社会システム論の射程と限界』NTT出版.
- 高橋顕也, 2016, 『社会システムとメディア——理論社会学における総合の試み』ナカニシヤ出版.
- 正村俊之 (編著), 2012, 『コミュニケーション理論の再構築——身体・メディア・情報空間』勁草書房.